

[巻頭言]

検証のすすめ

竹並 輝之

1 検証をしない若者達

大学で教えていて、最近の若者の行動に気になることがある。それは、自分の書いた文章やプログラムの検証をしなくなっていることである。これが情報機器の進歩がもたらした弊害ではないかというのが問題なのである。

まずは、答案、レポートなどの文章に誤字、当て字が多いことである。これは、文字をきちんと覚えていないことによるが、その最大の原因は若者の活字離れにあると思う。ビデオ機器とレンタルビデオの普及、ゲームマシンとゲームソフトの流通は、若者を活字文化から映像文化へと変身させ、若者が活字に触れる時間を減少させた。この変化のスピードに比例して誤字、当て字が増えてきたと思われる。さらに、高速インターネット上の映像配信ソフトとパソコンの高性能化により、個人がネット上に自由に映像を発信し、それを誰でもパソコンで閲覧できる時代になってきた。活字離れがさらに進むことは間違いないが、誤字、当て字はどこまで増えるのだろうか。

この動きに拍車をかけているのが、自分で書いた文章の見直し、検証をしなくなったということである。ワープロで作成したレポートには誤変換された単語が残ったまま提出されているものが多い。ちょっと見直せばすぐ気がつくと思われる誤変換が直されていない。私の姓を武並とか竹浪と記したレポートを平気で提出してくる。この見直しをしない習慣は、ワープロソフトのかな漢字変換率の向上がもたらした

たものではないであろうか。変換率が悪かった時代には、出力された文章には誤変換された単語がたくさん含まれていたの、注意深く見直さないと意味不明のレポートしか作れなかった。しかし、変換率が良くなるにつれて見直しの必要性が薄れてきて、その結果コンピュータの出力は見直さないでよいというような風潮がはびこり、さらにコンピュータの出力に限らず結果を見直す、検証するという作業がおざなりになってきている。簡単な数値計算も、見直しをしないため桁数が少し多いとゼロの数が多すぎたり、少なすぎたり、単位を間違えたりが多い。

プログラミングの演習では、コンピュータからの出力は正しいものと信じきっている学生がいる。プログラムを実行した結果が、明らかに常識から外れていようが検証することなく提出してくる。たとえば、在庫数量がマイナスになっていようが、残業代が1億円を超えていようがお構いなしである。また、デバッグ作業では、エラーメッセージを分析してエラーの原因を突き止めることよりも、命令文の修正、実行を試行錯誤で繰り返すことによりエラーを除去しようとする。これも、コンピュータの高速化とコンパイラの高性能化がゲーム感覚の試行錯誤を容易にし、その結果、論理的な検証をおろそかにさせていると思われる。

2 検証不足によるシステムトラブル

これまで述べてきた、情報機器の進歩が論理的な検証作業をおろそかにしているという傾向は、情報システムの開発にも好ましくない影響を及ぼし、システムトラブルの原因となったり、使いにくいシステムが出来上がったりする事例が増えてきている。2つの例を挙げてみよう。

第1の例は、北京オリンピックの入場券発売

Teruyuki Takenami

情報システム学会副会長

新潟国際情報大学情報文化学部

Niigata University of International and Information Studies

[巻頭言] 2008年8月27日受付

システムである。昨年 10 月に中国では、入場券の購入申し込みをインターネットで受け付けた。しかし、初日に申し込みのトラフィックが殺到してシステムがハングアップしてしまい、受付を停止した。このようなことは、インターネットで新しいサービスを開始する際にしばしば耳にする。携帯電話の番号ポータビリティ制の開始初日にも発生した。不特定多数を相手とするインターネットのトラフィックを予測するのは非常に難しいが、事前に慎重に検証し、予測することによりこのようなトラブルを防ぐことができるのではないだろうか。ハードウェアの開発が進み、お金さえ出せばいくらでも性能の良いハードウェアを入手できるようになった現在、トラブルが起こったら高性能のサーバに入れ替えればよいというような安易な考えで、システムとしての事前検証がおろそかにされることを危惧するものである。

第 2 の例は、新幹線の自動改札システムである。勤務先との往復に上越新幹線をよく使うが、東京駅改札口のゲートの通過率があまりよくないので後ろに並んでいる人がいららしている。ゲートが閉まって出られない人を観察してみると、乗車券と特急券の 2 枚の切符を同時に改札機に入れなければならないのに、1 枚しか入れていない人がほとんどである。地方から新幹線に乗ってくる乗客は自動改札に慣れていない人が多いこと、自動販売機は 2 枚のお札を同時に入れるとエラーになるという常識に

反すること、改札機の周りに書いてある注意書きを読む人は少ないことなどがその理由である。2 枚の切符を同時に読み取るという素晴らしい機能を持ったハードウェアが導入されたにもかかわらず、システム開発に当たって、このような乗客の行動の事前検証が不足していたのではないであろうか。人に優しいシステム作りには、人間行動の分析と検証が必要であるという事例である。

以上、情報機器の進歩が引き起こす検証行動の軽視傾向に対する危惧とシステム開発における論理的検証の必要性について述べてきたが、これらはいくまで私の感覚的な見解であって、検証してはいいないことをお断りしておく。情報システム学会には、このような情報システムを取り巻くさまざまな問題の客観的な分析、検証と対応策の検討を研究会やシンポジウムを通して推進してゆくことが期待されている。

著者略歴

1965 年 慶應義塾大学大学院工学研究科管理工学専攻修士課程終了。

1965 年 東京芝浦電気(株)入社。情報システムの開発、プロジェクト管理等を歴任。

1994 年 新潟国際情報大学情報文化学部情報システム学科教授。同大学情報センター長、情報システム学科長を歴任。